

令和 8 年度 北九州市 英語教育改善プラン

グローバル社会で活躍し、北九州市と世界の架け橋となる人材の育成

○「北九州市型外国語教育」の一層の充実による 9 年間を見通した外国語教育の推進

○ICT機器の活用とALTの効果的な授業への参画

目標

☒ 言語活動
 ☒ 指導と評価の一体化
 ☒ 教師の英語力・指導力
 ☒ 校種間連携
 ☒ ALTの参画
 ☒ ICTの活用
 ☐ AIの活用
 ☐ その他

(パフォーマンステスト含む)

(専科教員含む)

(AIを除く)

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

①発達段階に応じた外国語教育を計画的に行い、英語の音声や基本的表現に慣れ親しむ児童が増えてきている。

②目的・場面・状況を明確にした言語活動を通して、考えや気持ちを伝え合う授業が増加している。

未だ改善が必要な点

①ファンタイム(中学年)やパフォーマンスタイム(高学年)の実施内容や回数にばらつきがある。

②言語活動後の評価やフィードバックについての改善が必要である。

③ICT機器の活用やALTの授業への参画に差がある。

2. 要因分析

①②北九州市型外国語教育(小中 9 年間の系統性のある指導とアウトプット中心のカリキュラム)の実施により、言語活動の内容と割合が改善している。

①ファンタイムやパフォーマンスタイムのねらいや位置付けに対する共通理解を十分に図ることができていなかった。

②「指導と評価の一体化」を意識した具体的な取組や、単元を通した評価規準の設定に関する研修、実践の機会が十分でなかった。

③研修会や公開授業等を通して実践例や活用例の提示は行ってきたものの、十分に浸透していなかった。

3. 目標を達成するための施策・事業

①②「北九州市型外国語教育」の推進
～小学校低学年から 9 年間を見通した独自の外国語教育～

- 9 年間を見通したアウトプット中心のカリキュラムの推進
- 英語を学ぶことにワクワクし、主体的に取り組む児童・生徒の育成
- 児童・生徒が自分の考えや気持ちを英語で表現するアウトプットの場をこれまで以上に充実

- 特徴 1 小学校低学年からの指導「英語大好きタイム」
2 小学校中学年・高学年でのアウトプットの場の設定
3 単元毎に実施するパフォーマンステストとフィードバック

①②③

- ・ 北九州市型外国語教育ハンドブックの活用を図り、全市での共通理解を促進する。
- ・ 言語活動、ALT、ICT、評価に関する研修を充実させ、研修と実践の往還を図る。
- ・ 外国語科授業支援訪問を強化し、各学校や学級、さらには授業者の実態に応じた指導助言を行うことで、授業改善を進めていく。

その他

- ・ 引き続き中学校から小学校へ専科教員を配置する。
- ・ 小中連携・接続を意識した授業を強化する。
- ・ 「指導と評価の一体化」の一環として、英検ESGの受験を推奨する。

令和 8 年度 北九州市 英語教育改善プラン

目標

グローバル社会で活躍し、北九州市と世界の架け橋となる人材の育成

○CEFR A1レベル相当以上の英語力を取得又は有すると思われる生徒の割合（R7：53.1%⇒R8：55.0%以上）

☒言語活動 ☒指導と評価の一体化 ☐教師の英語力・指導力 ☐校種間連携 ☒ALTの参画 ☐ICTの活用 ☒AIの活用 ☐その他
(パフォーマンステスト含む) (AIを除く)

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

① 生徒の英語力（英検 3 級及びCEFR A1レベル相当以上）の割合が増加している
(R6:48.4%⇒R7:53.1%)

② R6全国学力・学習状況調査 質問調査
・自分の考えや気持ちを即興で伝え合う活動
(R5:70.8%⇒R6:75.4%)
・まとめた内容を英語で発表する活動
(R5:71.3%⇒R8:76.7%)

未だ改善が必要な点

① R5同じく質問調査
・学習以外で英語を使う機会が十分にあったか
(R5:29.3%)
・タブレットなどのICT機器を使用して、英語の音声を楽しんだり、話したりする
(R5:7.3%)

2. 要因分析

① 北九州市型外国語教育（小中 9 年間の系統性のある指導とアウトプット中心のカリキュラム）の実施により、言語活動の内容と割合が改善している。
（本市の拠点校 3 校では CEFR A1レベル相当以上の割合が 9 割に到達【GTEC】）

② ①に関する研修会を市内全小中英語科教員を対象に実施、外国語教育に関する支援訪問や拠点校での公開授業等、学校が研修と実践の往還ができるよう工夫したことにより、言語活動の質・量ともに改善されている。

① 授業改善で一定の効果は見られるものの、オンラインでの小中交流、遠隔や海外との交流などデジタル学習基盤を活用した授業の実施に至っていない。

3. 目標を達成するための施策・事業

① 「北九州市型外国語教育」の推進

～小学校低学年から 9 年間を見通した独自の外国語教育～

- 9 年間を見通したアウトプット中心のカリキュラムの推進
- 英語を学ぶことにワクワクし、主体的に取り組む児童・生徒の育成
- 児童・生徒が自分の考えや気持ちを英語で表現するアウトプットの場をこれまで以上に充実

特徴 1 小学校低学年からの指導「英語大好きタイム」

2 小学校中学年・高学年でのアウトプットの場の設定

3 単元毎に実施するパフォーマンステストとフィードバック

② 「北九州市型外国語教育ハンドブック」の活用と研修の推進

- ・①に係る研修・訪問授業・公開授業研究会等の充実
- ・英検IBAによる学習状況把握と学習改善・指導改善
- ・有識者による本市外国語教育の調査分析
- ・GTEC（一部実施）による学習状況の分析と横展開

① デジタル学習基盤を活用した授業の推進

- ・言語活動での適切なGIGA端末の活用（オンライン事業の推進）
- ・AI型学習アプリの活用と補充学習の強化
- ・言語活動と生成AIのベストミックスを目指した授業の実施と横展開
(R7の指定校は2校のため、R8はAI英語活用リーダーを活用し、4校に展開【小学校 1 校・中学校 3 校】)

令和 8 年度 北九州市 英語教育改善プラン

グローバル社会で活躍し、北九州市と世界の架け橋となる人材の育成

- CEFR A2レベル相当以上の英語力を取得又は有すると思われる生徒の割合50%を目指す
- CEFR B1レベル相当以上の英語力を取得又は有すると思われる生徒の割合15%を目指す

目標

- ☒言語活動 ☒指導と評価の一体化 ☐教師の英語力・指導力 ☒校種間連携 ☐ALTの参画 ☒ICTの活用 ☐AIの活用 ☐その他
(パフォーマンステスト含む) (AIを除く)

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

未だ改善が必要な点

- ① 授業での言語活動の割合と英語の使用状況の割合が増加している。(発話の50%以上、75%未満を英語で行っている)
- ② パフォーマンステストとALTの授業への参画の割合が増加している。(R7 50%以上、75%未満の授業で行った)

- ① CEFR A2/B1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合に課題がみられる。(市立高は一校のみのため、割合は非公開)
- ② デジタル学習基盤の活用やオンラインを活用した交流について課題がある。(R7 実施なし)

2. 要因分析

- ① 県主催の研修、本市指導主事の訪問・指導助言の実施、ALTの授業の効果的な参画により、言語活動が充実し、授業改善につながったと考えられる。
- ② 小学校と中学校での授業改善が進み、研修や拠点校での公開授業、教員の指導方法のマインドセットが効果的に行われていることが考えられる。

- ① 言語活動を中心とした授業改善が行われているものの、指導と評価の一体化に課題があると考えられる。
- ② デジタル学習基盤の活用の意識が教員によってばらつきがあり、推進にまで至っていないことが考えられる。

3. 目標を達成するための施策・事業

- ① 「北九州市型外国語教育」の推進
～小学校低学年から9年間を見通した独自の外国語教育～
 - 9年間を見通したアウトプット中心のカリキュラムの推進
 - 英語を学ぶことにワクワクし、主体的に取り組む児童・生徒の育成
 - 児童・生徒が自分の考えや気持ちを英語で表現するアウトプットの場をこれまで以上に充実
⇒そのために、令和7年度から市内全小中学校で「北九州市型外国語教育」の一層の推進と高校との情報共有
- ② 研修の機会の充実
 - ・外国語教育リーディングスクール公開授業研究会への参加促進
 - ・北九州市型外国語教育研修を始めとした研修会への参加促進と指導主事による学校訪問や指導助言の実施
 - ・福岡県外国語指導助手（JET-ALT）の指導力向上研修への参加促進
- ① 指導と評価の一体化のための研修や校内での指標の見直し
- ② 市内の中・高等学校や他府県・外国等とのオンライン交流の実施（市内や他府県の児童・生徒との交流、12年間で育む英語によるコミュニケーションの資質・能力の共有）

目標達成状況一覧表

北九州市教育委員会

令和8年度様式（様式2）
北九州市教育委員会管轄の高等学校は1校のみのため、一部非公表としています。

校種	指標内容		2023		2024		2025		2026		2027	
			目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
高等学校	①CEFR A2レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）											
	①CEFR B1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）											
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合（％）		60	75	75	55.6	100		100		100	
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した学校の割合（％）		50	75	100	77.8	100		100		100	
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	100	100	100		100		100		100	
		公表（％）	100	0	100		100		100		100	
		達成状況の把握（％）	100	100	100		100		100		100	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合（％）		80	100	100	100	100	80	100		100	
	⑥英語担当教員が授業における発話の半分以上を英語で行っている割合（％）		75	75	100	55.6	100	100	100		100	

校種	指標内容		2023		2024		2025		2026		2027	
			目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
中学校	①CEFR A1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）		50	48.3	50	48.4	50	53.1	55		60	
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合（％）		80	66.7	75		100		100		100	
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した学校の割合（％）		100	77.4	100		100		100		100	
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	100	100	100		100		100		100	
		公表（％）	100	93.5	100		100		100		100	
		達成状況の把握（％）	100	87.1	100		100		100		100	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合（％）		45	42.6	45	36.4	45	58.9	60		65	
	⑥英語担当教員が授業における発話の半分以上を英語で行っている割合（％）		80	63.8	70		75		75		75	

校種	指標内容		2023		2024		2025		2026		2027	
			目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
小学校	「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	60	64.3	70		100		100		100	
		公表（％）	30	32.5	40		100		100		100	
		達成状況の把握（％）	60	57.1	70		100		100		100	